

皆のぶんまで

生かしてらっしゃう

新藤兼人監督作品

一枚のハガキ

豊川悦司 大竹しのぶ

六平直政 柄本明 倍賞美津子 大杉漣 津川雅彦
川上麻衣子 絵沢萌子 大地泰仁 渡辺大 鹿赤児

監督・脚本・原作・新藤兼人

第23回 東京国際映画祭
審査員特別賞受賞

www.ichimai-no-hagaki.jp

戦争がすべてを奪った。戦争が人生を狂わせた。それでも命がある限り、人は強く生きていく。

新藤兼人、映画人生最後にして最高の傑作

映画を愛するすべての人に、
いまを生きるすべての人に、
観てほしい。

日本映画界の至宝、
新藤兼人が99年の人生をかけた
最後の最高傑作。

戦争末期に徴集された兵士100人のうち、94人が戦死し6人が生きて帰ってきた。その生死を分けたのは、上官が彼らの任務先を決める為にひいた「クジ」だった——。モスクワ、ベルリン、モンリオールなど海外の映画祭をはじめ、国内でも日本アカデミー賞、東京国際映画祭など国内外で数々の栄誉に輝く日本最高齢（99歳）の巨匠・新藤兼人。彼が自ら「映画人生最後の作品」と語る本作は、自身が生き残った兵士6人のうちの1人である新藤監督の実体験を元に作られた。人の命が「クジ」に左右され、兵士の死は残された家族のその後の人生をも破滅に導く。そんな戦争の愚かしさを、新藤兼人は体験者ならではの目線で、時に激しく、時に笑い飛ばすように描いてみせた。

戦争ですべてを失った男と女。
彼らを巡り合わせたのは
「一枚のハガキ」だった。



戦争末期。中年兵として徴集された男は、仲間の兵士から「今日はお祭りですが あなたがいらっしゃらないので 何の風情もありません。友子」と記された一枚のハガキを託される。終戦後、そのハガキの送り主である兵士の妻を訪ねると、そこには夫の亡き後、たて続けに家族を失い、古家屋とともに朽ち果てようとしていた女の姿があった——。反戦のメッセージとともにスクリーンから溢れるのは、すべてを失ってもなお、たくましく生き抜く人々の力の素晴らしさ。生命力溢れる美しいラストシーンに込められた「希望と再生」へのメッセージは観る者に大きな感動をもたらすだろう。また、豊川悦司、太竹しのぶら歴代の新藤作品に出演した豪華キャストが勢揃いし、新藤監督の最後の想いを届ける。



住居
が
き
な
い
た
い

兼人

